とある戦闘機の戦闘知性

orotot

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある戦闘機の戦闘知性

【Nコード】

N2537L

【作者名】

orotot

【あらすじ】

とある魔術の禁書目録と戦闘妖精・雪風のコラボ。

学園都市と戦闘知性体が交わる時、物語が始まる

ッ

プロローグ

約30年前、南極に撃ちこまれた 通路 からジヤムと呼ばれる地球外生命体が出現した。

その後、ジヤムを 通路 の向こう。フェアリイと名づけられた未知の惑星に封じ込めることに成功した。

その後、フェアリイ星にFAF（フェアリイ空軍）がつくられ、ジヤムはフェアリイ星で食い止められた。

当初は優秀な人材を戦線に送っていた地球だが、次世代のリーダーとなる人物が次々に死んでいくことに恐れを抱いた地球各国は、高度なコンピュータたちに戦闘をまかせ、FAFに犯罪者を送るようになった。

そして、目に触れなくなったジヤムは人々の関心を失っている。だが、いままフェアリイでの戦いは続いている。

そんなFAFが地球の注目を浴びることになったのはわたし、リン・ジャクスンが書いた「ジ・インベーター」の続編がきっかけだった。

ある日届いたFAF情報軍のロンバート大佐からの宣戦布告。

にわかに信じられない内容だったが、わたしはなにか起きるので は、と 通路 に向かった。

そして、タイミングを見計らったように出てきた特殊戦第五戦隊 一番機、パーソナルネーム『雪風』。

そこからの通信を聞いたわたしはすぐに、「ジ・インベーター」の続編を書いた。

そして大ヒットした。

だが、地球には大した影響がでず、やはりフィクションとして扱

われたのが現状だ。

だが、今回は地球にも少ないながら影響がある出来事が起きた。

フェアリー星への入り口、 通路 が見えなくなったのだ。

いままではキノコ雲のようにあった 通路 だったが、それが突然消えてしまった。いや、見えなくなってしまったのだ。

当初は消えたかと思っていた地球陣営だったが、ある日突然なものもないところから突如、特殊戦機が一機、飛び出てきたのだ。

特殊戦機は、こちらの偵察と情報を伝えにきたのだ。

その後、FAFからFAFの代表を乗せた輸送機が到着、そしていま、フェアリーではなにが起きているかの説明がされた。

公開はされなかったが、わたしは別の方法で知ることができた。

特殊戦の出撃管理などをしているブッカー少佐からの手紙だ。

なにしろ、あちらでも混乱が起きて手紙の中身など確認されないで発送されているからこのような手紙が届けられたのだ。

内容は。

『ロンバート大佐のクーデターとジャムの大侵攻は終わったが、その後、厄介なことが起きた。当分はなにも起きないと思われていたが、それは単なる油断だった。』

突如、 通路 がいくつかに増えたのだ』

その内容にはロンバート大佐からのなみに戸惑った。

『今のところ、5つほどあるが、STC（特殊戦術コンピュータ）とSSC（特殊戦戦略コンピュータ）はまた増えるだろうと言ってきている。』

そして、それが地球への 通路 かわからなくなってしまった。

FAFからの要請で、特殊戦機が5つの通路に飛んで行ってなにがあるかを偵察したところ、どれも地球に似た惑星、または次元な

どにつながっていた。

だが、残りの4つの惑星にはF A Fが存在しなく、攻撃をされたりなどして戻ってきた。

一機、六番機のミンクスがF A Fが存在する惑星を見つけたため、そこを地球として認めた。

この手紙が届いているということは地球ということもわかる』

などなどのことが書かれていた。

わたしはブツカー少佐に返事を書いてから、実際に 通路 を見に来た。

ジャムは、またなにかを始めるのかもしれない。

*

場所や次元などが変わり、別の地球の日本、東京の西部を切り開いて作られた学生の街、学園都市。

いつも通りの日常が続いていた。

だがある日、一機の型式などもまったく不明の輸送機と思われる航空機が学園都市の23学区の隅のほうに不時着した。

一時はエイリアンかと思われたが、乗っていたのは人間だったという話だった。

だが、搭乗員の身元がまったくわからないという不思議な事態に陥っているのだ。

その乗員たちは学園都市の病院に收容されている。不時着の衝撃で怪我をしているのだ。

同じ病院に入院していた上条当麻は今日、めでたく退院だった。

「まったく、魔術師に襲われるのが普通の高校生か……？」

とブツブツ文句をいいながら、片づけをする。

（思ったより金あるから、いつもより豪華にいくか）

と同居している銀髪碧眼のシスターのことを考えながら思う上条。荷物をまとめてカエル顔の医者にもうこないようにね、と言われた上条。

（帰る前にトイレにでも行くか……）

とトイレに入ってしまったのが、新たな不幸の始まりだった。

プロローグ（後書き）

新シリーズですが、一緒に書いている「頭文字S」があつて、こちらを優先したいのでこちらはかなり間が空いてしまつかもしれない。

ちなみに、雪風のほうですが、機体だけはOVA版を基準に書くつもりなのでご了承ください。

ちなみに、双方の原作（アニメ版なども）はかなり面白いので未見の人はどうぞ！

こちらが面白くないのなら、それは自分のせいです。

1話「通路D」

上条は用を足しに近くのトイレに入った。

「ん？」

そこには体調を崩したのか、戻している男性がいた。

「大丈夫ですか？」

と、心配をした上条は声をかける。

「ゲホツ……ああ、ありがとう……」

と男性は言ってくるが、顔色が悪い。

「病室までいけますか？」

「ん……ゴホツ！」

なにかを言いかけてまた戻し始めた男性。

どうするか悩んでいた上条に。

「ちよつと失礼」

と後ろからまた男性の声。

「ああ、すみませ」

と振り返る途中で言葉が止まる。何故なら新たに来た男性は、銃を持っていたからだ。

（なんだ！？ 吐いてるあの人は、なんかのVIPなのか！？）

と仮説を立てていたが。

「ちよつと、ご足労を願うよ」

と言った直後、なにかスプレー状のものをバラまいた。

「ッ！？」

上条の意識が薄れる。おそらく、気化性の眠る作用のある薬が撒かれたのだろう。

対ジャム戦の助けになるかと思い、突如増えた 通路 に2機の戦隊機を飛ばして監視をさせている特殊戦。

その実質的な副司令官を務めるジェイムズ・ブッカー少佐は出撃のスケジュールなどを練っていた。

普段はあまり戦隊機を出さない特殊戦だが、ジャムとの戦闘がなくても2機を出しているのだ、少佐の苦労も大きくなる。

そんなブッカー少佐のオフィスを誰かがノックした。

「入れ」と少佐。あまり上官のクーリイ准将は来ないので敬語でなくても平気なのだが

「少佐、厄介なことになった」

いつもの冷静さを若干失いながら入ってきたのはクーリイ准将だった。

少佐はスツと立ちあがって敬礼。

「どうしたのですか？」といいながら准将の顔色をうかがう。

まるで、大きなミスを見つけた時のような顔だ。

「通路 が増えた時、行方不明になった国連軍の定期便が一機の中に」となにか、怒りや困惑などを押し殺すように間を開けてから「ジャム人間が混じっていた」

「なんですって……」とその言葉でいつきに動揺するブッカー少佐。あやうく、いつもの紳士的な態度を崩すところだった。

ジャム人間とは、ジャムがコピーした人間のことで、D型ポリペプチドで出来ており、分子レベルで鏡面反転している。コピーされた方は、死んだ延長線上だと思っっているため、見分けなどでは区別ができないのが厄介だ。

「そんな、間違いではないのですか……？」

「間違いない。STC（特殊戦戦術コンピューター）も可能性は大だと言っている」とひと束の資料をデスクに置いた准将。「これが、STCが出した資料だ。SSC（特殊戦戦略コンピューター）も間違いはないだろうということを行っている」

「なんで、そんな間違いが……？」と資料に目を通しながら言う少佐。「一番恐れていたことではないか」

と自分達の失敗ではないものの、F A F全体にかかってくる可能性がある。

「おそらく、ロンバート大佐がいなくなり、情報軍の体勢が崩れているのが原因だろう」と准将。「あのクーデターによって情報軍の名誉はなくなつたも同然だからな」

情報軍に所属していたロンバート大佐によるジャムと結託したクーデターによってF A Fは壊滅寸前までいったのだ。特殊戦の活躍によって今まで通りの戦闘ができるようになるまで復旧したが、もはや情報軍に力は無いも同然。

「だから、前線基地まで監視がいき届かずこうなってしまったのか……」と少佐。

「もし、定期便が迷い込んだ異世界の地球が、われわれと同じ食事を取っていたらさらに厄介なことになりかねない……」と准将。

ジャム人間はわかる人はわかるだろうが、人間とは違う物質で出ているため消化ができず、普通の食事はできない。逆に普通の人間もジャム人間の食事は食べられない。

もし、迷い込んだ先で病院のようなものに收容され、ジャム人間だけが普通の食事をできず怪しまれ、調べられて別の物質でできているとわかってしまい、それを無関係の定期便の乗務員、普通の人間たちが知ってしまったら、もし連れ返せるようになっても一生監禁というのもありえる。

「できればすぐにでも、戦隊機を複数の 通路 に送りたい。計画を立てて欲しい」と准将。

「わかりました」と少佐は敬礼をしながら返す。

*

上条は運悪く、特殊戦で話していたジャム人間が間違えて普通の飲み物を飲んでしまつて戻っていたのを見てしまったのだ。

で、アレコレ話しているうちに、戻っていた男性からの証言で、まったくの無関係となつて、釈放された上条。

(だあーッ！ もう昼メシの時間じゃねえか……インデックスに噛みつかれそう……)

と家に帰つてからのシュミレーションをする上条。

(でも、なんだつたんだ)

と、戻っていた男性のことを思い出す上条。

別室に連行された時、食いものかわからないものが所せましとあったのだが、それは食器などに入っていた。

(まあ、考えてもわからんか)

ととりあえず詮索はやめる。

寮に帰つたら腹をすかせた白いシスターに噛みつかれる運命をたどらなくてはいけない状態だと気付いた上条は。

(不幸だあ

ッ！)

と心の中で叫ぶしかなかった。

*

特殊戦のブリーフィングルームでは特殊戦一番機の搭乗員、深井零大尉と桂城彰少尉が 通路 の先の偵察に関してのブリーフィングを受けていた。

「今回、雪風には一番情報が多そうな 通路D に突入してもらう。しかし、前回通ったランヴァボンによると、あちらは科学技術が高い可能性がある。十分に注意してくれ」

今まで暫定的だった複数の 通路 の名称。F A F からみる普通の地球への 通路 は 通路 A としてその後には B / C / D / F となっている。

今回雪風が突入するのは 通路 D と呼ばれるところだ。

「了解しました」と桂城少尉。

「了解した」と深井大尉。

と言つて席を立つ二人。

今回の任務は戦略偵察、普段は戦術偵察が主な特殊戦では異例だ。出撃の前に最後の簡単なブリーフィングを行う。

「では、今回の武装について変更したいのか？」と少佐。

「とくにありません」と少尉。

「なあジャック、もしあちらで戻れなくなったら？」と深井大尉。

「そんなのは許されない。必ず帰ってこい、特殊戦の至上命令だ」と少佐。

特殊戦の至上命令。味方を犠牲にしても帰投せよ。今回のミッションも、同じことなのだ。

「言ってくる」と言つて少佐のオフィスを出る大尉と少尉。

雪風に搭乗し、装着された武装を確認する零。

胴体下に偵察ポッド。少々大きめだがネット回線にもつながれたり空気を調べたりする。他は主翼の下に短距離超高速ミサイルが二発。中距離可変速ミサイルが二発。主翼上に長距離ミサイルが4発。その他2000発の機銃。

武装のセイフティが外され、エレベーターに向かう雪風。

メインディスプレイに目をやると雪風の前に別の 通路 に向かった特殊戦機の状態が移っている。

すでにカーミラは侵入して通信不能になっていた。

零も後席の桂城少尉と離陸の準備を整える。

管制塔から離陸許可が出る。

「B - 1、離陸する」

雪風がフェアリーの大地を蹴って離陸していく。未知のエリアに向かつて

一旦 通路D の手前で空中給油を受けることになっている。

それは増槽などで武装などを減らしたくなかったからだ。

「まもなくミルキー4とのコンタクトに入る」と零はディスプレイを確認して言う。

「了解」と少尉。

すぐにミルキー4の姿が見えてきた。

その後のすぐに給油の体勢が整う。零は進路などを修正して給油を雪風に任せて司令部と連絡を取る。

「こちらB - 1、雪風、ミルキー4とコンタクト、給油後予定通り通路D に侵入する。」

『こちら司令部了解、幸運を祈る』

それから2、3分で給油は終わり、 通路D へと向かう。

「少尉、なにが起こるか分からないから注意しておけ」と零。

「わかっていますよ」と桂城少尉は答える。

やはりこの男と息が合う、と零は思う。

周囲に問題なし。

雪風は 通路D に吸い込まれるように飛んでいく。

通路D を抜けた先にはマンションのような建築物がならぶ都市があった。

「偵察を開始する。準備はいいか？」

「オーケーです」

「了解、3 / 2 / 1 スタートナウ」

「イエッサー。戦略偵察開始」

零は操縦に専念する。

雪風は大気の状態やその他の情報を探る。

桂城少尉はネットに接続してどのようなことを調べる。

この連携によって情報を集める。

「ここは、学園都市というのか……」と後ろの桂城少尉。

「少尉、最低限の情報でいい」と零。

「イエッサー」と言ってから雪風から警告。「雪風がこの都市の重要部の情報のセキュリティ解除をいいか、と質問してきてます」

「許可しろ」

「了解、申請を許可を伝えました」

即座にセキュリティ解除を始める雪風。

操縦に専念していた零の耳に警告音が響き渡る。

「大尉」と後席の桂城少尉。「詳細は不明ですが迎撃機と思われる飛行物体が接近しています いや。へりだ。へりが三機接近してきています」

学園都市の一角から学園都市最新鋭、HSAFH-11通称『六枚羽』だ。

「了解」と零。「桂城少尉、今雪風がしているセキュリティの解除とデータのコピーが終わったら即刻帰投する」

「了解」と少尉。「目標、増速、ヘリじゃないのか？ VTOL機だったのか……でも速い」

「情報収集は中止して交戦に備えろ」と零。

「了解、さらに増速、速度約M・2」

雪風が表示する学園都市の重要情報のセキュリティ解除までの時間をみながら考える零。これにコピーの時間も必要なのだ。どこまで燃料がもつか。

零は雪風をこちらからは見えない 通路D の方向に向けて飛ばす。

学園都市と戦闘知性体が初めて交わる時が近づく

1話「通路D」(後書き)

うまくかけたか不安です……

次回は『六枚羽』VS雪風です。

どっちが勝つか、わかるでしょうがww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2537/>

とある戦闘機の戦闘知性

2010年10月11日05時40分発行